

経営部門

北海道広尾郡広尾町
小田治義【酪農経営】

牛を牛らしく、伸び伸びと飼いたい



小田さんご一家

第 58 回日本酪農研究会酪農経営コンクール最優秀賞

小田治義さんは、農家であった祖父の影響で農家になることをめざし、昭和 62 年に畜産大学に入学。在学中の実習などを通じて、土・草・牛作りで世代の連綿をつないでいく酪農に魅力を感じ酪農家になることを決意した。そして大学卒業後、アメリカで農場研修を約 1 年、北海道鹿追で酪農ヘルパーを 3 年半経験した後、平成 8 年に現在の広尾町に同僚の酪農ヘルパーであった奥さんとともに新規就農した。就農にあたっては、北海道が新規入植者の支援事業として推進するリース牧場（既存施設と農地 27ha の貸与）を年間 320 万円の支払いで 5 年リースする方法を導入した。このリースに対し、広尾町が半額（年間 160 万円）の補助支援を行った。また、平成 13 年には経営基盤強化資金等を借り入れ、現在の経営規模（経産牛 46 頭、牧草地 35ha）になっている。

経営の特徴をあげると、第 1 に生乳 1kg 当たり生産原価が、45.3 円と非常に低いことである。小田さんは、牛群検定に加入し、データを活用した繁殖効率を追求し、積極的な更新をしてきた結果、経産牛 1 頭当たりの年間乳量は 9,384kg を達成しているが、高泌乳にもかかわらず、経産牛 1 頭当たりの購入飼料費を低く抑えており、経産牛 1 頭当たりの購入飼料費は 160 千円を達成している。この購入飼料費の低減は、低水分ロールサイレージを中心とした飼料体系と、集約放牧による適正区画ローテーションの実施などにより実現している。また、新規就農でありながら、設備投資を極力抑えて減価償却費が少ないこともあげられる。

第 2 に廃用牛（更新牛・除籍牛）を 1 頭当たり平均 25 万円の高値で販売していることである。更新牛を肉用ではなく搾乳牛の販売と考えており、事故がなくても更新率を 20%～30%に設定して有利販売することを計算しながら廃用している。

事故をなくし、分娩間隔を短くして分娩回転数を上げ、正確な更新計画で乳量の向上とともに牛ならぬ廃用牛の高値販売を行う。これは、中小家畜での回転数や非生産日数を中心に管理する精密経営と相通じている(分娩間隔 366 日、平均授精回数 1.8 回、初産分娩月齢 22 ヶ月、空胎日数 115 日以上 30%)。

以上のように、小田さんの経営は、むやみに規模の拡大に走ることなく、事故や無駄を無くし、効率を追求することに主眼をおいた経営であり、すなわち規模拡大よりも経営の質的向上にねらいを定めた経営である。この経営の質を意識した経営は大いに参考とすべき事例であり、これからの新規就農者に 1 つの進路を示している。

放牧地から見た牛舎

入植 4 年目の平成 11 年から飼料コスト、労働コスト削減と牛の体調を考え集約放牧を導入した。



フリーバーン牛舎内部

牛舎と放牧地は隣接しており、自由に行き来が可能となっている。



フリーバーン牛舎

牛へのストレスが少ないとの考えから、牛舎は木造で建築した。



フリーバーン牛舎内部

1 日 2 回の除ふんと 1 回のオガコ投入でクリーンドライ化を心がけている。



手作りのカウハッチ

放牧を利用した足腰の強い育成牛をつくっており、12ヵ月齢から受精する。



たい肥舎

ふん尿はたい肥舎に貯留後、全量を草地に還元している。

